

# かきくけことばあそび

突然、「かきくけことばあそび」を思い立った。その契機は、何事も思うようにならない状況下において、打開策は何もなく、ただただ時間だけが経過し、現実を直視することなく、逃避している事実をうすうす認識しているから。要するに暇なのである。

「ことばあそび」にはどのような種類があるのか、思いつくままに列挙してみた。しりとり、回文、でたらめあそび（作為的な無作為）、ことばリズム、オノマトペ、かるた、川柳、早口言葉、地口（駄洒落）・・・今回は、しりとりと回文を取り上げよう。

---

## 【しりとり】

よた) ねえねえ。しりとりしようよ。

さだ) うん。いいよ。

よた) 何からはじめようか。

さだ) なんでもかんでもだったら、たくさんありすぎて、面白くないね。

よた) じゃあ。食べ物にしようか。

さだ) ああ。いいよ。お前らしくて丁度いいよ。で、そっちから。

よた) あっ。こっちからか。うーん。何にしようか。

さだ) この時期たくさんあるよ。コタツの上には、必ずあるよ。ほら、こうやって皮をむいて、口に入れると、甘くて、酸っぱくて、ほら。橙色でさ・・・ほら。

よた) あっ。オレンジ。

---

【回文】「トマト」「しんぶんし」「たけやぶやけた」・・・当たり前ではあるが、3文字以上の奇数となる。もし偶数なら「いくくい」「とししと」「くるるく」「とししと」（例として、行く年・来る年を分解・展開）回文の定義に反するし、無意味。

「だんしがしんだ」立川談志さんが亡くなってから、もう5年が経過した。この時期に相応しい「第九」とともに「芝浜」が付き物。もう生では、視聴できない。（一度は生で体験・体感したかった）将来、同じ処へ逝って、生で「芝浜」を味わいたいが、どうしたら同じ処へ逝けるのか。「徳を積む」と同じ処へ逝けるなどとは、思えない。

なぜなら、落語とは、古今亭志ん生さんは「真っ暗闇の中で、さぐりさぐり歩いている時に、プツと放屁する様なもの」と言われ、桂枝雀さんは「緊張の緩和」と理論付け、そして、立川談志さんは「人間の業の肯定」と断言された。つまり、死を以って、それを立証したことより、「徳を積む」ではなく、「人間らしく生きる」が必要条件に思える。

何れにしても、一つの解釈として、落語とは究極の「ことばあそび」であり、「ことばあそび」が表現手段として芸術までに昇華したものと。と言えるのではないか。